

解の基二編

中

^ 13  
2909  
8



へ 13  
2909  
8

明鳥後正夢卷之五

明鳥後正夢章

江戸

南仙笑楚満人  
瀧亭鯉夫 合作

第九回

有八無るる六板を世の中にあられりぬの目早を歌う  
と上宮あつても御とく お世ふ町 さいころとくなく いざ 実ふ いさ 西直也  
一具の依侍よ いそ ちと いそ もは いそ ひ いそ 六神 いそ の いそ あ いそ ら いそ の  
ありと六板れど いそ 春日 いそ の いそ お いそ 願 いそ と いそ の いそ 六 いそ の いそ 目 いそ 早

昭和九年  
七月二一日

かゝるる身もいぬさうとりのをやう見増し守る  
病の床もつら祖母の女抱も山向ける業あり  
わがぐ戸側わがきの風も身おまむぐとわらうける女も  
まぶしの業もさあさるぬをまひぞ中せらるる  
同じ由も来も考ぐめのすうらぬ程細もたまる業  
ごとまをらうる程おもひすぐの承ぐと痛れ  
ぬまゝ小起おきの知く親くお怒が影屋の口老母らうが業師の  
生いんげんまを念ぐさぐくとまぐとよる業福あり

はきせぬおのひらり 影屋のかうくおあはせ 今も月を  
いろう冷ひえ手すぐさぞ おまむひござりませうあなご  
少すこお休やすこさるうませぬ お怒おこ入いすも痛入いたす  
たのしむももさうく痛やうとらひまことあてるが  
嘆なげまゝる嘆がなげ 相身あいによむぐく私わたくしはむねがらう  
ござりませう 祖母妙具六 成程その公事のこと初年  
時ときら時次とき初と兄弟の根ねよ責せむが海うみはらじい  
の娘むすめづらひハ日ひも同どうおののこようわらう

むすめづらひ

い

トシヨシヨシのふらんぶりのちまひもせまね  
えびやうのあまのふり火供の石供合とらふ  
年寄のしんももるちまひと藤田のちまひ  
極よちのちまひといひまじりも煙づく花の結を  
可也トシヨシヨシのちまひとらふ見やうとあらや  
業カトまじりてせまねのちまひとらふ長持  
みよちのちまひとせまねとらふと涙生じろ老の癪由も同  
とらふとらふ由カのちまひとらふとらふとらふとらふ  
法中カのちまひとらふ医師のちまひとらふ神カのちまひとらふとらふとらふ

さめぐい抱カてとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
佛カのちまひとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
奉カりてのちまひとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
あらて夜カのちまひとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
ちまひとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
まじりてとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
連カてとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
とらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ

わがわが

三









とも昔のよ。いそ昔のね言のやうに女あつはして。  
 終りの子供の時。素雲が志のぶらと大目場と深  
 の二役。素雲今入何とやら。女房と中りして迎奉  
 ぶ方の秋もあがらしほし。仲のあそびをいふてあそ  
 ぶ。まよるも何ら仕らみかあつらひりて。いふはあつはして  
 子。いふはあつらひりて。いふはあつらひりて。いふはあつらひりて。  
 小い。いふはあつらひりて。いふはあつらひりて。いふはあつらひりて。  
 まよるも何ら仕らみかあつらひりて。いふはあつらひりて。いふはあつらひりて。







あつたかたのきつ 九

まじづきひらりてで陸一エしこしう〜あつた私にけりかたのあつたの由願がけ  
又成田へ参りて戻つづけ。うきうきとひらりてわらひて  
つぎぞ一そちまもくまぬやうむねわさしんちしん時に  
そんなら浦里うり侍の便りがあるて陸〜  
かまへぬい浦里まゝのまゝあり時こそあつたものつぎ  
いそめた明ても書てもおれがあつたまゝあつたまゝあつたまゝ  
ぶりまもるうが。あつたのまゝあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
へあつたもあつたあつた。先をそのお便りもあつたの由は

まじづきひらりてで陸一エしこしう〜あつた私にけりかたのあつたの由願がけ  
又成田へ参りて戻つづけ。うきうきとひらりてわらひて  
つぎぞ一そちまもくまぬやうむねわさしんちしん時に  
そんなら浦里うり侍の便りがあるて陸〜  
かまへぬい浦里まゝのまゝあり時こそあつたものつぎ  
いそめた明ても書てもおれがあつたまゝあつたまゝあつたまゝ  
ぶりまもるうが。あつたのまゝあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
へあつたもあつたあつた。先をそのお便りもあつたの由は













知らぬはゆい。ききうつんまが時次郎さん。ふりまを  
 居てまさん。息文をめてひんえ。目まうの  
 恨も何も何も。顔もてさう。うらむ。かき。おの  
 うらむ。まう。うらむ。時次郎ひひ。抱かき。わ  
 後のまあ。と。終も。竹も。あ。や。さ。は。ま。知。の  
 浮世のま。うらむ。青。花。又。うらむ。春。日。の。氏  
 奥の。下。圓。の。て。あ。ひ。ひ。つ。ら。う。あ。あ。目。し。時  
 次郎さん。ま。ま。ん。せ。と。ま。た。お。ど。ろ。く。祖。母。の。貞

ま。ま。ら。ま。ま。が。ら。措。ら。う。て。こ。れ。く。お。て。る。ゆ。り。中  
 お。そ。れ。て。う。と。胸。の。ま。ま。ま。う。こ。ま。ま。が。呼。び。ま。せ  
 活。く。て。色。青。ま。あ。う。ま。の。風。情。め。ま。ら。ま。の。ま。ま  
 う。ま。ま。の。ま。お。て。る。ま。ま。う。ら。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま  
 と。呼。び。の。ま。ま。を。申。ま。ま。ま。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま  
 階。と。ま。ま。ま。ま。折。り。ま。ま。の。ま。ま。の。成。田。ま。ま。の。ま。ま  
 酒。を。井。油。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま  
 春。日。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま



備前の一編を押し免渡せらるてよし又云  
 此の所の所へ兼てきりし事あるの所あり  
 我れあつるの心う時夜静  
 ぬれぬの涙かゝ金たすまあらはしき夢の跡あり我  
 身物れ義七はさす中へんとの夢へ死せん  
 幸ひのありていふありて面目なく今更なるは  
 さらすものありて義七は物事の跡へ  
 さはのひきつるをなせしそは誠なる心物なす

解〜其の心くもあつるまはけあり  
 女ごのありて目送るの義七ありて  
 此の所へしては義七は今ならせん  
 らぬものありては義七は物事の跡へ  
 こゝの所へは義七の心は知りて行幸一の  
 功なりしは義七の心は知りては義七の  
 母はあつる心は義七の心は知りては義七の  
 ちがひは義七の心は義七の心は知りては義七の





ろまどものめぐるん。えいど病家つらいつのまに死の笑顔  
 やむてふか養生の得本の妙のあつた。うらゝそ  
 のまどまうこびも。めぐる周景の藤塚まうが悪く又露  
 頭のものむたより。金まの長七が身のおうらひも産死  
 藤立席が胸のちをりて今まが。第十回目に説法で  
 三編同中の巻のうらゝとあるして入後合

明烏後正夢巻之五 早

